欲望の接合点

――『彼岸過迄』論――

土屋　慶文

一　すれ違う語り

『彼岸過迄』を論じた諸々の作品論において、「語りと構成」をめぐる問題は、常に中心的なテーマであり続けてきた。『彼岸過迄』の「語りと構成」の取り扱いは、この作品を「須永の物語」と読むか「敬太郎の物語」と読むかを左右するものであるほか、漱石の創作上の「成功／失敗」を論じようとする論者にとっても、重要な問題だったからである。

分析の対象とされてきたのは、語り手たちに注目した論においても、また、聴き手の敬太郎に注目した論においても、語られた内容・語り手や聴き手の態度である。そこでは、物語行為がきちんと聴き手に向けてなされているか否か、言い換えれば、語り手と聴き手の間でコミュニケーションが成立しているか否かについては何の疑いも持たれてこなかった。本論では、作中人物にして語り手の一人でもある須永市蔵の物語が誰に向けられているのかを今一度問い直すところから出発し、『彼岸過迄』に登場する人物たちのコミュニケーションの様相を考察していく。またそれを通じて、他者と関係を取り結ぶことを拒否する者として読まれ続けてきた須永像を再考したい。

まずは作中人物の語りを分析していきたい。

一読すれば分かるとおり、『彼岸過迄』の語りは入れ子構造になっている。基本的には、物語世界外にいる三人称の語り手によって物語行為が行われているのだが、時々、作中人物によって語られた物語言説が挿入される。「須永の

話」では須永を語り手とする物語が、「松本の話」では松本を語り手とする物語が、それぞれ挿入されている。「須永の話」における須永市蔵による語りの中にも、感情の吐露や自分の行動への弁解や補足の説明を数多く確認できる。もっとも、これは至極当然のことである。「須永の話」は、須永が自分と千代子の間に起きた出来事について敬太郎に語り聞かせる章であり、その際の言葉がそのまま物語言説になっているからである。敬太郎という、ただ一人の聞き手の前で物語行為をしているのだから、一対一で話を聞かせる状況において、補足や感想を話の途中に挟むのは不自然なことではない。しかしこの物語言説中には、須永は敬太郎に話を聞かせているという前提を揺るがすような記述が見られるのである。

斯う云つても人には通じないかも知れないが、僕は意地の強い男で、又意地の弱い男なのである。（「須永の話」十三、傍線引用者、以下同じ）

僕は何んな苦痛と犠牲を忍んでも、超然と手を懐ろにして恋人を見棄てゝ仕舞ふ積でいる。男らしくないとも、勇気に乏しい、意志が薄弱だとも、他から評したら何うにでも評されるだらう。（「須永の話」二十三）

高木には夫から以後ついぞ顔を合せた事がなかつた。千代子と僕に高木を加へて三つ巴を描いた一種の関係が、夫限発展しないで、其中の劣敗者に当る僕が、恰も運命の先途を予知した如き態度で、中途から渦巻の外に逃れたのは、此話を聞くものに取つて、定めし不本意であらう。（「須永の話」二十五）

然し実を云ふと、僕は千代子の口から直下に高木の事を聞きたかつたのである。さうして彼女が彼を何う思つてゐるか、夫を判切胸に畳み込んで置きたかつたのである。是は嫉妬の作用なのだらうか。もし此話を聞くものが、嫉妬だといふなら、僕には少しも異存がない。（「須永の話」三十）

それぞれの引用には「人」・「他」・「この話を聞くもの」

といった言葉が使われている。わざわざ「この話を聞くもの」という言葉を使って物語行為がなされている理由を合理的に説明することはできるのであろうか。一つには、敬太郎が公表を前提にして、須永から聞き取りをしているのだと考えれば一応の説明はつく。しかし、物語が始まる前の二人のやり取りではそのようなことは一切話されていないので、辻褄が合わない。この「須永の話」という章の大部分は、自分と千代子の間にこれまでどのようなことがあったのかについて、須永が敬太郎に語り聞かせた談話によって構成されている。須永は敬太郎に一対一で話を聞かせているのだから、はじめの引用と二つ目の引用ではそれぞれ、「君には通じないかも知れないが」、続く引用では「君から評したら何うにでも評されるだらう」という語り方を選んでもいいはずである。

残り二つの引用箇所については、右と同じ理由で、「君に取つて、定めし不本意であらう」・「君が嫉妬だといふなら」、という語り方を選ぶ方が、より自然であるとさえ言える。ここで、もしかすると、前半の二つの引用した記述に関しては、自己評価に一般性があることを強調するためにこのような言い回しがされているのだと理解すればすむのではないかという意見があるかもしれない。しかし、次の事実によってそうした読みが成立する蓋然性はきわめて低いものとなる。須永の叙述において、「君」等の二人称を使った、聴き手＝敬太郎に対する呼びかけは一度も行われていないのだ。須永が敬太郎だけに向けて物語を語ろうとしていると断定できる根拠は、少なくとも須永の語りの中には確認することができない。須永は敬太郎を目の前にしながらも、敬太郎だけに向かって物語を語ろうとはしていないのである。

それでは一体、須永は誰に向かって物語を語っているのか。この問題について考えるための足がかりとして、藤井淑禎による、いま引用したのと同じ箇所についての評価を見てみたい。

敬太郎を乗り越えて直接、読者を相手どっているようにも読めてしまう。（中略）批評性と啓蒙性が豊富で、かつ、この時でなくては、というケースをまって始めて一人称体はその力を十二分に発揮するようなのだ。その意

味で、後期三部作中で四つの要素をすべて満たした完璧といっていい一人称体は、『こゝろ』の先生の遺書にほかならなかった。（中略）この完璧さと比較すると、その他の一人称体はどこかに綻びがあるし、その分、色褪せてみえる。（中略）後期三部作を書き継ぐ過程で、漱石は、一人称体が豊かな可能性をもつ反面、時には足枷ともなり、綻びをも招きかねないことを思い知らされることになったのではないだろうか。[1]

須永の言葉が「読者を相手どっているようにも読めてしまう」とする分析は秀抜である。しかし、藤井は「批評性と啓蒙性が豊富で、かつ、この時でなくては、というケースをまって始めて一人称体はその力を十二分に発揮する」とする立場からこの須永の語りを、漱石の一人称体が成熟していく過渡期に見られる「綻び」と意味付けるに留めており、「読者を相手どっているようにも読めてしまう」語りが持つ可能性の考察はなされていない。本論は、『彼岸過迄』における須永の語りが、敬太郎のみを相手どった語りとして読めないことの意味を、登場人物間の行為の連鎖を分析しながら考察していくものである。

それでは、須永市蔵という人物についてはどのような評価がなされてきただろうか。これまで重ねられてきた『彼岸過迄』論には、須永について論じたものが少なく（敬太郎論や構成の成否を論じたものが圧倒的に多い）、しかも評価はほぼ一様となっている。たとえば、中村直子は「須永の話」を須永と千代子の「関係性の物語」とし、高木との競争を避け、千代子からのアプローチに応じることもない須永を「他者との結びつきを切望しながらも、その自意識の高さゆえに関係性の場を構築できない人間」と論じた。[2] 佐藤泉は、母の思惑通りに千代子と結ばれることを拒否する須永は、「他人の物語に浸透された自己の生に脅え」る「物語の目的論に対する疑いを抱く主人公」として意味付け、「終わり＝目的に向かって統一される言葉の秩序を否認することは、他者の意図の円満な完結に向かう機能を失調させる意志と考えることができる」と論じている。[3] また、これと似た論として、工藤京子は千代子によって貼られた「不人情」のレッテルを解体するための須永の語りの戦略性を指摘しているが、この指摘は、「他人の物語に浸透され」ることを

拒否する者としての須永を論じた佐藤の論のフォローであると言えよう。[4]

いずれの論者も、他者からの働きかけを拒否する者として須永を意味付けていることが分かるだろう。言い換えれば、須永の振る舞いにコミュニケーションや関係性の断絶を見ていると言える。しかし、各々の論には疑問に感じられる点も多い。工藤の論は敬太郎論として書かれたものなので措くとして、中村直子の論では、「須永の話」を、「須永と千代子の間で相関的に生成される物語」であるとし、須永の物語としてのみ読まれてきたことに対する問題提起を行っているのだが、肝心の、千代子がいかに「須永の話」の生成に関わっているのかということについては言及されていない。一方、佐藤の論は、「物語」という言葉の意味が「虚構」や「生」といった言葉と混同されており、決め言葉だけが滑走したレトリックにしか聞こえないきらいがある。

またそもそも、本当に須永を「他人の物語」を拒否し、関係を取り結ぶことを拒否する人物と結論付けてもよいのだろうか。ここでN・ルーマンのコミュニケーション理論を援用して考えてみたい。ルーマンは、コミュニケーションを行為の連鎖として分析したわけだが、これに従えば、須永が母親の意向に背いたことや、高木に嫉妬し鎌倉を去ったことも一つの「行為」であるのだから、須永の反応をディスコミュニケーション[5]と見なさない解釈が可能になるはずである。本論では、須永が周囲の人物によって投げかけられた行為に（たとえそれがストレートな対応ではないにせよ）きちんと応答していることを示し、さらにどのように応じたのかという点についても説き明かしていきたい。そして彼の応答の態度と彼の語り方の響き合いも併せて示していく。

二　ねじれてつながる

須永が敬太郎ではなく、不特定多数の他者を相手に物語を語っているように読めることは、どのような意味を持つのかという問題についてはじめに考察する。このことについて考えるために、まず、須永の他者との関わり方について分析していきたい。結論を先取りして言えば、「語りなが

らも語らない」須永の態度は、行為の連鎖をひたすら拒否していく人物像を反映しているように見えるが、その実それは、須永なりの、敬太郎の「好奇心」に対するねじれた応答なのである。以後、本文の具体的な分析をしながら須永の態度を読み解いていきたい。

行為の連鎖を拒否する須永の性向は、彼が初めて作中に登場した瞬間からしるしづけられている。

「敬太郎に須永といふ友達があつた。是は軍人の子でありながら軍人が大嫌で、法律を修めながら役人にも会社員にもなる気のない、至つて退嬰主義の男であつた」(「停留所」一)

この記述には、自分の血統に対し否定的な須永の態度と、就職して社会に参画することを拒否するものとしての須永の性質がよく表れている。これらの性質は、この小説全体を統べている三人称の語り手のみが下した一方的な評価ではなく、後に須永自らの言葉によっても裏打ちされる。たとえば自分の血統に対する否定的な態度は、「自分の顔を鏡の裏に見るたんびに、それが胸の中に収めた父の容貌と大変似てゐるのを思ひ出しては不愉快になる」(「須永の話」三)という言葉や、父の忠告を聞いた際の「父の小言を丸で必要のない余計な事の様に考へて病室を出た」(同三)という反抗的な述懐から確認できる。彼の、社会に出ていくことを拒否する態度に関しては、「就職といふ問題について唯の一日も頭を使つた事がない」(同五)、「全く信念の欠乏から来た引込み思案」(同五)、「僕は時めくために生れた男ではない」(同五)、「僕は如何なる意味に於ても家名を揚げ得る男ではない」(同五)といった言葉たちがそれと符合している。

再生産のサイクルから逸脱する性向を持った人物として登場した須永は、この他にもあらゆる行為の連鎖を拒否するかのような振る舞いを見せる。「雨の降る日」において須永は、宵子の死に際して人並みに悲しむことのできない「不人情」な人物として描かれる。

二人の問答を後の方で冷淡に聞いてゐた須永は、鍵なら僕が持つて来てゐるよと云つて、冷たい重いものを袂

から出して叔母に渡した。御仙が夫を受付口へ見せてゐる間に、千代子は須永を窘めた。

「市さん、貴方本当に悪らしい方ね。持つてるなら早く出して上れば可いのに。叔母さんは宵子さんの事で、頭が盆槍してゐるから忘れるんぢやありませんか」

須永は唯微笑して立つてゐた。

「貴方の様な不人情な人は斯んな時には一層来ない方が可いわ。宵子さんが死んだつて、涙一つ零すぢやなし」

「不人情なんぢやない。まだ子供を持つた事がないから、親子の情愛が能く解らないんだよ」（「雨の降る日」七）

「市さん、もう用意が出来たんですつて」

須永は千代子の声を聞いて黙つた儘帰つて来たが、

「あの竹藪は大変見事だね。何だか死人の膏が肥料になつて、あゝ生々延びる様な気がするぢやないか。此所に出来る筍は屹度旨いよ」と云つた。千代子は「おゝ厭だ」と云い放しにして、さつさと又並等を通り抜けた。（同八）

御坊が小器用に歯を拾い分けて呉れた時、顎をくしゃくしゃと潰してその中から二三枚択り出したのを見た須永は、「斯うなると丸で人間の様な気がしないな。砂の中から小石を拾ひ出すと同じ事だ」と独言の様に云つた。下女が三和土の上にぽたぽたと涙を落した。御仙と千代子は箸を置いて手帛を顔へ当てた。（同八）

一つ目の引用で須永は千代子から「不人情な人」と責められるわけだが、続く引用部においても須永は、幼子の葬式の場で口にするにしてはあまりに無神経な言動を取り続ける。彼の一連の発言は、身内の死に際しての反応としては「あさっての方向」を向いたものであると言える。宵子の死に対する悲しみを表明し、涙を流す千代子や御仙とは対照的で、常識的な行為の連鎖を拒否しているように読める。須永自身は「不人情なんじゃない。まだ子供を持った事がないから、親子の情愛が能く解らない」のだと釈明をしているが、これと同内容のことは先ほどの「退嬰主義」の場合と同様に、「須永の話」の中で須永自身の叙述という形を取って、「僕は子がないから、自分の血を分けた温たかい肉の塊りに対する情は、今でも比較的薄いかも知れない」

と語られている。この性向もまた、三人称の語り手のみによる評価ではなく、須永自身の語りの中でも印象付けられているものなのである。

須永が素直な応答を見せない場面はこれだけではない。前節で挙げた佐藤の論や中村の論でも考察の対象となっている「千代子との結婚の拒否」を無視することはできない。これこそが須永による「行為の連鎖の拒否」の最も顕著な例であり、それゆえに度々テーマ化されてきたからだ。しかし本論では、須永が千代子との結婚・恋愛を果たさなかったことを佐藤の言うような「恋愛物語」「家族物語」の拒否として見なすことはしない。むしろ須永は、千代子とのコミュニケーションにおいて、それは通常期待されるものではなかったかもしれないが、応答それ自体はきちんと果たしていたのだと考えたい。

確かに須永は、母の筋書き通りの振る舞いをすることはなかった。そのことは、後悔とも懺悔ともつかない調子で、初めは抽象的に、やがて具体的に語られている。

僕は母に対して決して従順な息子ではなかつた。父の死ぬ前に枕元へ呼び付けられて意見された丈あつて、小さいうちから能く母に逆らつた。大きくなつて、女親だけに猶更優しくして遣りたいといふ分別が出来た後でも、矢つ張り彼女の云ふ通りにはならなかつた。（「須永の話」三）

父が死んで以後の今の僕は母に対しての一人息子である。だから僕は母を出来る丈大事にしなければ済まない。が、実際は同じ源因が却つて僕を我儘にしてゐる。（同四～五）

母は僕の高等学校に這入つた時分それとなく千代子の事を仄めかした。その頃の僕に色気のあつたのは無論である。けれども未来の妻といふ観念は丸で頭に無かつた。そんな話に取り合ふ落ち付さへ持つてゐなかつた。（同六）

其時僕は適当な機会を利用してわざと叔父に「千代子さんの縁談はまだ纏まりませんか」と聞いた。それは固

より僕が千代子に対して他意のないといふ事を示すためであつた。が又一方では、一日も早くこの問題の解決が着けば、自分も安心だし、千代子も幸福だと考えたからである。（同八）

右に引用した通り須永は母の期待に応ずることなく、千代子が自分の妻になる可能性の芽を摘み取るような行動を重ねていく。須永は実際、敬太郎に自分と千代子の過去を語る時点に至るまではもちろん、小説が終わりを迎える時まで千代子と結婚することはなく、母の期待に応えてはいない。しかし、その際に直接相対していた千代子とのやり取りにおいて、須永の行為がどのような意味を持っていたかについては別の問題として考えなければならないだろう。「結果として結婚をしていないこと」から、物語批判の構造を読むのは手続きとしては分かりやすいかもしれないが、結婚しないこともまた、一つの応答として見なすべきである。それを素朴にコミュニケーションの「断絶」と見なした途端に、「過程としての恋愛の中にある葛藤」を分析することで見えてくる複雑な行為の連鎖の様相を見落としてしまうことになるのである。

須永と千代子のコミュニケーションは、互いに相手の期待に応える形では行われていないが、「行為の連鎖」は常に成立している。例えば、須永が自身の千代子に対する好意に気付かされる場面。

僕は自分の気分を変へるためわざと彼女に何時頃嫁に行く積かと聞いた。彼女はもう直に行くのだと答へた。

「然しまだ極つた訳ぢやないんだらう」

「いいえ、もう極つたの」

彼女は明らかに答へた。今まで自分の安心を得る最後の手段として、一日も早く彼女の縁談が纏まれば好いがと念じてゐた僕の心臓は、此答と共にどきんと音のする浪を打つた。さうして毛穴から這ひ出す様な膏汗が、脊中と腋の下を不意に襲つた。千代子は文庫を抱いて立ち上つた。障子を開けるとき、上から僕を見下して、「嘘よ」と一口判切云ひ切つた儘、自分の室の方へ出て行つた。

僕は動く考もなく故の席に坐つてゐた。僕の胸には

忌々しい何物も宿らなかつた。千代子の嫁に行くか行かないかが、僕に何う影響するかを、この時始めて実際に自覚する事の出来た僕は、それを自覚させて呉れた彼女の翻弄に対して感謝した。僕は今迄気が付かずに彼女を愛してゐたのかも知れなかつた。或は彼女が気が付かないうちに僕を愛してゐたのかも知れなかつた。（「須永の話」十）

ここでは、千代子は嘘をついているのだが、逆にそのことによって　須永は「自分の千代子への好意」という真実にたどりついており、逆説的なコミュニケーションが成立しているのである。先に用いたコミュニケーションメディアの概念で言うならば、「真理」のコミュニケーションとしては成立していない（千代子は嘘をついた）のだが、須永が狼狽という反応を見せることで、須永の千代子に対する好意が示されており、「愛」のコミュニケーションとしては立派に成立しているのだ。これと似たコミュニケーションの構造は、次の記述からも確認できる。

千代子は其中から僕の描いた画を五六枚出して見せた（中略）

「貴方それを描いて下すつた時分は、今より余程親切だつたわね」

千代子は突然斯う云つた。僕には其意味が丸で分らなかつた。画から眼を上げて、彼女の顔を見ると、彼女も黒い大きな瞳を僕の上に凝と据ゑてゐた。僕は何ういふ訳でそんな事を云ふのかと尋ねた。彼女はそれでも答えずに僕の顔を見詰てゐた。やがて何時もより小さな声で「でも近頃頼んだつて、そんなに精出して描いては下さらないでせうね」と云つた。僕は描くとも描かないとも答へられなかつた。たゞ腹の中で、彼女の言葉を尤もだと首肯つた。（「須永の話」十）

須永には、千代子がなぜ「貴方それを描いて下すつた時分は、今より余程親切だつたわね」と言ったのかが分からない。千代子に訳を問うても彼女はただ眼差しを送るのみで言葉では答えない。一方の須永も、自分が再び千代子のために「精出して」絵を書いてやることができるかどうか

答えられない。しかし一方で、千代子の言葉を「尤も」だと「首肯」する。この場面において、声のレベルでのディスコミュニケーションがある一方で、ノンバーバルなレベルでコミュニケーションが成立しているということは、ひとつ前の引用に見られる、二重化したコミュニケーションと相似を成していると言える。従来の研究において須永は「関係性」を遍く拒否・断絶する人物として読まれてきたわけだが、それは、三人称の語り手の言葉を鵜呑みにし、繊細なコミュニケーションの過程の分析が脱落していたことでもたらされた、「創られた須永像」であったと言えよう。

それでは、須永と敬太郎の応答関係はどのように描かれているのだろうか。この小説の原理の部分に注目すると、『彼岸過迄』の物語を駆動しているのは敬太郎の「好奇心」と就職活動であると言える。彼は好奇心を満たすために人から話を聞いて回り、また、職を得るために人から人へ紹介を受けて話を聞いて回り、時に使いを頼まれる。作中におけるその役回りとしても、実際に物語の構成上果たしている機能の面から見ても、敬太郎は作中における「話を聞く欲望」を一手に引き受けた人物である。一方須永は、これまでに確認してきたことより、「他人の欲望に対する素直な応答を拒否する」人物であると言える。須永が、敬太郎に「職の斡旋」と「好奇心の充足」の両方を要求されることによって、この両者の間にも「期待に応えない応答」としてのコミュニケーションが生起することになる。

今しがた君の家へ這入つた女は全体何者だと無邪気に尋ねる勇気も出なかつた。却つて自分の先へ先へと走りたがる心を圧し隠すような風に、「空想はもう当分已めだ。夫よりか口の方が大事だからね」と云つて、兼て須永から聞いている内幸町の叔父さんといふ人に一応さういふ方の用向で会つて置きたいから紹介して呉れと真面目に頼んだ。（「停留所」三）

それで約一時間程須永と話す間にも、敬太郎は位地とか衣食とかいふ苦しい問題を自分と進んで持ち出して置きながら、矢張先刻見た後姿の女の事が気に掛つて、肝心の世渡りの方には口先程真面目になれなかつた。（同四）

須永の話を段々聞いてゐるうちに、敬太郎は斯ういう実地小説のはびこる中に年来住み慣れて来た須永も亦人の見ないような芝居をこつそり遣つて、口を拭つて済ましてゐるのかも知れないといふ気が強くなつてきた。固よりその推察の裏には先刻見た後姿の女が薄い影を投げてゐた。（同四、傍線引用者）

最初の引用には、好奇心を充足したい気持ちを抑えて就職の斡旋を依頼する敬太郎の姿が描かれているが、好奇心を「圧し隠すような風」しかできなかっただけあって、二つ目の引用箇所では、敬太郎の関心が須永と千代子の間に何があったのかを知ることへと収束していることを読み取ることができ、三つ目の引用に至ると敬太郎にとって須永はドラマの種として見なされているのが分かる。なぜ敬太郎の関心がそちらへ傾いたのかということに関しては、「それは小六づかしい理窟だから、仮令どんな要求から起らうと敬太郎の為に弁ずる必要はないが、此頃になつて偶然千代子の結婚談を耳にした彼が、頭の中の世界と、頭の外にある社会との矛盾に、一寸首を捻つたのは事実に相違なかつた」と三人称の語り手によって説明されている。合理的な説明を放棄し、「弁ずる必要」のないものとして語られていることから、敬太郎の動機付けがまさしく「原理」として位置づけられていることを読み取ることができよう。

しかし、須永は敬太郎の二つの要求に素直に応じることはしない。まず敬太郎が得ることができたのは、自分の「愚か」を自覚することにしかならなかった探偵行為のみであった。このはぐらかしは非常に巧妙である。なぜなら探偵行為の契機をもたらすことは、「職の斡旋」の要求への素直な応答を避けることになっているばかりか、自分と千代子との関係から、好奇心の矛先を逸らすことにもつながっていたからである。

須永が敬太郎の問い詰めから逃れることができずに自分の過去を語りだすには、「須永の話」を待たねばならないわけであるが、ここでも須永は素直に敬太郎の要求に応じてはいない。そこで要請されたのが、二人称による語りかけを排し、不特定多数の他者に向けて語りかけているように読める語りだったのである。それまで一貫して行為の連鎖

を拒否する者であるかのように現われていた須永が、「須永の話」において初めて「素直」に嫉妬をする事実（この点については次節で論じる）も含めて、それらは、敬太郎の「話を聞く欲望」と須永の「語ることを拒否する欲望」の接合点において生起した、物語の構造上の必然だったのである。

三　決裂のスイッチ

前章まで、須永のコミュニケーションは、ねじれてはいるがきちんと成立しているのだということを確認し、須永の敬太郎に対する語りの態度について説き明かしてきた。しかしここで一つの疑問が残る。それは、屈折を孕みながらも好意の伝達に成功している須永と千代子がどうして結ばれなかったのかという問題である。本節では、この問いに対して独自の見解を示していきたい。

なぜ須永は素直に千代子と愛を育まないのかということになると、須永の説明は途端に抽象度を増していく。最も端的に説明がなされている部分でも「一口に云ふと、千代子は恐ろしい事を知らない女なのである。さうして僕は恐ろしい事丈知つた男なのである。だから唯釣り合はないばかりでなく、夫婦となれば正に逆に出来上るより外に仕方がないのである」（「須永の話」十二）と、具体的な説明は徹底的に排除されている。続く叙述においては、千代子の注ぐ「美くしい天賦の感情」に見合うだけの「権力」や「財力」を得ることができないからだという内容のことが語られるが、須永は「随分友達を羨ましがらせる位置に坐り込む機会」（「須永の話」五）に恵まれるほどの境遇にあったわけであり、この説明は信憑性に欠ける。そして、須永の物語行為が一度中断する直前では、再び「恐れる／恐れない」という区別が持ち出され、さらにそこに「詩人／哲人」の二元図式が組み合わされるという形で、いよいよ抽象の度合いを増していく。

> 僕は自分と千代子を比較する毎に、必ず恐れない女と恐れる男といふ言葉を繰り返したくなる。（中略）恐れない女と恐れる男といふと、忽ち自分に縁の遠い詩と哲学を想ひ出す。叔父は素人学問ながら斯んな方面に興味を有つてゐる丈に、面白い事を色々話して聞かしたが、僕

を捕まへて「御前の様な感情家は」と暗に詩人らしく僕を評したのは間違つてゐる。僕に云はせると、恐れないのが詩人の特色で、恐れるのが哲人の運命である。（「須永の話」十二）

千代子が何を「恐れない女」で、須永が何を「恐れる男」なのかということについては、「素直に感情を表すこと」や「自分の出生」として考えるのが妥当であると思われるが、それよりも問題なのは、果たして須永自身がこの説明でもって自分自身を納得させ、千代子を諦めることができているのかということであろう。答えはもちろん否である。それは、この十二からの引用と対応するかのような次の記述にもっとも顕著に表れている。

芝居に似た光景は幾幕となく眼の前に描かれた。僕は其何れをも嘗め試ろみる機会を失つて却つて自分の為に喜んだ。人は僕を老人みた様だと云つて嘲けるだらう。もし詩に訴えてのみ世の中を渡らないのが老人なら、僕は嘲けられても満足である。けれども若し詩に涸れて乾びたのが老人なら、僕は此品評に甘んじくない。僕は始終詩を求めて藻掻いてゐるのである。（「須永の話」二十五、傍線引用者）

須永は先程の引用では、叔父が「暗に詩人らしく僕を評したのは間違つてゐる」と語っていたのだが、ここでは「僕は始終詩を求めて藻掻いてゐる」と語る。これらの食い違った叙述を、須永の「二枚舌」や「矛盾した述懐」として理解し、信用しないこともできるが、これはやはり須永の千代子に対する愛によって表れた、「切実にねじれた態度」として解釈すべきだろう。引用部の叙述は、千代子をめぐる争いを予感し鎌倉から引き返した旨と、もし自分が鎌倉に残っていた場合に繰り広げられたであろう恋の争いの想像が語られた直後に話される。したがって、須永は素直に千代子との恋愛に邁進することを意識していたか、あるいは、恋の成就を望んでいたと考えることができる。そうなると、須永が「母親の期待を拒否」するに至るまでには、これまで見てきた「ねじれてつながる愛のコミュニケーション」や、今確認した「恐れない男になろうとする意志」

を粉砕するに足るような、強力な装置が必要となる。本論ではそれを「高木への嫉妬」だと考えたい。そしてこの嫉妬は、須永が唯一見せた、ストレートな行為の連鎖であったためにクリティカルに須永と千代子の衝突を引き起こしたのである。須永の高木に対する嫉妬は、初めて高木が登場した時から確認できる。

「彼等（引用者注：田口夫妻）は第一に僕の弱々しい体格と僕の蒼白い顔色とを婿として肯がはない積らしかつた」（「須永の話」七）

彼は見るからに肉の緊つた血色の好い青年であつた。年から云ふと、或は僕より上かも知れないと思つたが、そのきび〳〵した顔付を形容するには、是非共青年といふ文字が必要になつた位彼は生気に充ちてゐた。（同十六）

僕は此男を始めて見た時、是は自然が反対を比較する為に、わざと二人を同じ座敷に並べて見せるのではなからうかと疑ぐつた。無論其不利益な方面を代表するのが僕なのだから、斯う改まつて引き合はされるのが、僕にはたゞ悪い洒落としか受け取られなかつた。（同十六）

僕は初めて彼の容貌を見た時から既に羨ましかつた。話をする所を聞いて、すぐ及ばないと思つた。夫丈でも此場合僕を不愉快にするには充分だつたかも知れない。けれども段々彼を観察してゐるうちに、彼は自分の得意な点を、劣者の僕に見せ付ける様な態度で、誇り顔に発揮するのではなからうかという疑が起つた。其時僕は急に彼を憎み出した。さうして僕の口を利くべき機会が廻つて来てもわざと沈黙を守つた。（同十六）

須永の嫉妬は、肉体的なコンプレックスをきっかけに引き起こされる。「わざと沈黙を守った」須永の態度からは、額面通りには高木とのコミュニケーションを拒否していることを読み取れるわけだが、ここでより重要なのは、その後の叙述で「斯う解釈したのは僕の僻みだつたかも分らない」「若し夫が本当に僕の僻み根性だとすれば、其裏面には

未凝結した形にならない嫉妬が潜んでゐたのである」と、自分の心に潜む「僻み」と「嫉妬」の存在に関しては、須永がそれを素直に認めている点であろう。素直に行為の連鎖にコミットすることを拒否してきた須永は、高木と千代子との関係において、初めて素直に嫉妬の感情を語り始めるのである。また、高木と出会うまで「恋の嫉妬」を知らずにいた旨を語る際に「僕は普通の人間でありたいといふ希望を有つてゐる」（「須永の話」十七）という言葉が同時に語られるのだが、これは須永に「普通」の応答をするための感情がすでに備わっていた証として読むことができるだろう。なお、この直後には次のような記述が見られる。

僕は其時高木から受けた名状し難い不快を明らかに覚えてゐる。さうして自分の所有でもない、また所有する気もない千代子が源因で、此嫉妬心が燃え出したのだと思つた時、僕は何うしても僕の嫉妬心を抑え付けなければ自分の人格に対して申し訳がない様な気がした。（「須永の話」十七）

この引用部では、千代子を「所有する気」がないと語られているが、前頁で確認したように、二十五章では「詩を求めて藻掻いてゐる」須永の一面が吐露されていることから、この言葉を額面通りに受け取ることは慎重に避けるべきであり、語る現在における須永の記憶の編集の痕跡として解釈するのが妥当であると言える。以上に見てきたとおり、須永は高木に対して嫉妬の情を抱くわけだが、このあと須永は嫉妬ゆえに鎌倉を離れ、さらに鎌倉から離れることで千代子から、自分を愛していないのだと思われることになる。

同時に此無意味な行動のうちに、意味ある劇の大切な一幕が、ある男とある女の間に暗に演ぜられつゝあるのでは無からうかと疑ぐつた。さうしてその一幕の中で、自分の務めなければならない役割が若し有るとすれば、穏やかな顔をした運命に、軽く翻弄される役割より外にあるまいと考へた。（「須永の話」二十二）

僕は強い刺戟に充ちた小説を読むに堪へない程弱い

男である。強い刺戟に充ちた小説を実行する事は猶更出来ない男である。僕は自分の気分が小説になり掛けた刹那に驚ろいて、東京へ引き返したのである。（同二十五）

「ぢや僕も招待を受けたんだから、送つて来て貰えば好かつた」

「だから他の云ふ事を聞いて、もつと居らつしやれば好いのに」

「いゝえ彼の時にさ。僕の帰つた時にさ」

「左様するとまるで看護婦見た様ね。好いわ看護婦でも、附いて来て上るわ。何故さう云はなかつたの」

「云つても断られさうだつたから」

「妾こそ断られさうだつたわ、ねえ叔母さん。偶に招待に応じて来て置きながら、厭に六づかしい顔ばかりしてゐるんですもの。本当に貴方は少し病気よ」（同三十）

最初の二つの引用は、須永が千代子をめぐる「競争」を降りるまでの述懐である。そして三つ目の引用が、須永の母を送って来た千代子と須永の会話である。須永はもともと「不人情」のレッテルを貼られるなどしていたわけだが、この会話における須永と千代子の関係の険悪さは決定的である。お互いに見送りを「断られさう」だと思っていたことで、見送りの不成立が引き起こされているばかりか、須永は千代子に「本当に」「病気」であると、辛辣に難詰されてもいる。やがて、「須永の話」の終わりにおいて、あまりにも有名な須永と千代子の激しい衝突の場面が語られるわけだが、そこでも千代子に届いているのは「嫉妬」のみであり、親愛のコミュニケーションは断絶している。

須永と千代子のコミュニケーションが、それぞれが別種のコードに則って応答するという過程を経ることで成立していたことは、前節で確認した通りである。そこで萌した愛を破壊したものは、それとは対照的な、率直に応答された嫉妬の情だったのである。

［注］

1　藤井淑禎「『彼岸過迄』から始まる道」（『国文学　解釈と教材の研究』一九九二・五）

2　中村直子「『彼岸過迄』――その関係性の物語――」（『東京女

子大学紀要論集』第四一巻第二号、一九九一）

3　佐藤泉『『彼岸過迄』――物語の物語批判――」（『青山学院短期大学紀要』第五〇集、一九九六・一二）

4　工藤京子「変容する聴き手―『彼岸過迄』の敬太郎―」（『日本近代文学』第四六集、一九九二・五）

5　N・ルーマンは『信頼　社会的な複雑性の縮減メカニズム』（大庭健・正村俊之訳一九九〇・一二、勁草書房）において、「コミュニケーション・メディアは、象徴的に一般化された選択のコードである。その機能は、諸々の選択作用をある一定の長さの連鎖を介して間主観的に伝達する可能性を保証することにある。真理、愛、権力、貨幣は、進化をつうじて効力を発揮する代表的なメディアの事例である」と述べている。